

子宮留膿症について



子宮留膿症（しきゅう・りゅうのうしょう）とは

子宮留膿症は子宮に細菌感染が起こり、子宮腔内に膿汁が溜まった状態です。かつては比較的まれな病気で、子宮がん（とくに子宮体がん）の合併症のひとつと考えられてきましたが、超高齢化に伴ってしばしば見られるようになりました。

脳梗塞や神経疾患、認知症などによって日常生活動作が車椅子移動や寝たきりで、尿・便失禁のためオムツを使用している場合に多く、80歳代で19.1%、90歳以上で33.3%と高齢化するほど増加しますが、子宮がんの合併は以前考えられていたほど多くありません（東京都多摩老人医療センター調査1991年）。



子宮留膿症 MRI 画像

子宮留膿症の原因と症状

原因は大腸菌など便の中の菌がほとんどで、オムツ内で外陰部が便に汚染され、さらに腔内から子宮へと感染が広がったと考えられ、おもな症状は帯下（おりもの）の異常が最も多く、次いで不正性器出血、ときに発熱などがあります。同様に尿道周囲が汚染された場合は膀胱炎や腎盂腎炎など尿路の感染や血尿を起こすことがあり、しばしば合併します。

子宮留膿症の診断と治療

超音波検査で子宮腔内の膿汁のたまりを確認することで診断できます。治療はピニールやゴムでできた柔らかい細い管（カテーテル）を子宮腔内に通して中にたまった膿汁を誘導・排出・洗浄するとともに膿汁の細菌培養検査を行って原因となる菌を確認し、抗生物質を投与すること。併せて子宮頸部・体部の細胞診検査でがん細胞の有無を確認するのが原則です。ただし、寝たきりの状態が長く下肢の開排制限がある（足が開かない）場合や認知症の程度によっては婦人科診察台での診療が困難なため、可能な範囲での検査・治療となる場合があります。

子宮留膿症の経過と予後、予防など

子宮留膿症は、局所治療（膿汁排出）と全身治療（抗生物質）によって速やかに改善することが多いのですが、元々の原因は日常動作の不自由とオムツの使用なので、それが改善しない限り再発のリスクがあります。予防にはこまめなオムツのチェックと陰部洗浄が予防に有効ですが、ご本人がいやがる場合もあり、できる範囲で構いませんので励行してください。

- ・まれに子宮がんなど悪性疾患が発見されることもありますが、ご年齢や合併症によっては手術など積極的な治療がむずかしい場合があります。
- ・治療後、定期的通院の必要はありませんが、出血や帯下がみられたら早めに婦人科にお連れください